
「風」という名の人。

ねつ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「風」という名の人。

【Nコード】

N4315Q

【作者名】

ねつ。

【あらすじ】

彼女は耳を澄まして、彼のピアノを聴き続けます。
そんな二人を見守る切ない人もいます。
実の弟を本気で愛した人もいます。
そして、そんな彼らに日常を与えた人もいます。
そんな人たちを待っている結末とは？

今日この頃、ただそれだけのこと。

もう、夏が終わった。

楽しかった夏休みも終わり、高校二年の秋がユズにやってきた。

始業式の今日は授業がないので、昨日夏休みの宿題を小学生の如く深夜までやっていた彼女にとっては幸福な日だ。

式後のホームルームを終え、入学のころよりずいぶんボロボロになつてしまつた鞆に筆箱と財布をしまつていたのだが、誰かに顔前に何かをつき出されてユズは手を止めた。

「海行つた時の写真」

それだけ言つて、その人はそれをユズの机に置くと、そのままこちらに顔を向けるようにして前の席に座つた。

彼はアキという。

ユズが中学三年の時から一緒にいる、彼氏というやつだ。

アキは自分の髪の毛を茶色く染めて、指にはお気に入りだという指輪をつけているちよつとしたチャラ男よりだ。

そんな彼氏の格好を彼女はよくは思っていない。

ユズはどちらかというと真面目でパーカーを着てその上から学校指定の上着を着ているくらいで、これといって特徴のない普通の女子高生なので、なぜ自分がアキと気が合うのか分からなかった。

そんな彼氏と彼女は今、一枚の写真に集中していた。

「これアキ気持ち悪い」

「おい待てちよい待て。『キモイ』じゃなくて『気持ち悪い』っていうのやめろ。余計へこむわ」

「だってみんな普通に笑顔で写つてんのにあキだけ変顔とか空気読んで写りなよ」

「うつせーよ」

その写真は夏休みの後半、仲の良い同級生で海に行つた写真だ。誘つたのはユズの親友、サキだった。

今年は特に暑かったから誰も断らず、その涼しい話にのつたのだ。

話は夏休みにさかのぼり、彼女と彼とその友人は「海」に来ていた。海、という響きは久しぶりだった。

ユズ達が住んでいる町は山が近い田舎だったので、海なんていつ以来だろうと彼女は思った。

「すげー、人」

まるで人を初めて見るかのような口ぶりでアキは言った。

夏休みだということもあって、平日にもかかわらずたくさんの人が海という夏の樂園に溢れていた。

「とりあえず、なんか飲む物買ってくるよ。ユズ何がいい？」

ユズが少し斜め上を見るくらいがちょうどいい身長親友、サキが尋ねてきた。

「コーラ」

即答でユズが答える。

うわっ、即答と彼女に返してからサキはアキにも欲しいものを訪ねた。

「俺、かき氷食べたい」

「あんた、お腹弱いのにまた痛くするよ」

サキのクールな忠告も無視して、彼は笑顔で指を鳴らしてこう言った。

「あ、イチゴね」

「はいはい、じゃあ行ってくる。ユイが向こうで準備してくれてるから」

会話が成立していないままサキはその場を後にした。

「行けってこと」

ユズが通訳すると、アキはなるほど、と納得の表情を浮かべた。サキは時々、述語のない会話をする。

日光浴用のチエアなどを用意していたのは、ユイだった。

女みたいな名前だとユズは思っているのだが、見た目は列記とした男。

ユイは海だというのに顔上はいつもの学校スタイルと変わらず、銀縁眼鏡に直もうな長めの黒髪だった。

そのユイは優しいとはとも言えない性格だったけれど、それはただ不器用なだけだということはユズもアキもサキも分かっていた。

「がんばってるねー」

「お前も手伝えバカ」

アキがおちよくるようにユイに言った。

その攻撃を受け止めて、すかさず返すところがなんともユイらしかった。

「サキが飲み物買ってきてくれるとさ」

ユズは砂遊びをやり出したアキを横目に見ながらユイを手伝った。

「いいよ、もう終わったから」

「ごめん、全部やらせた」

するとユイは少しこちらを向いて言った。

「準備に手間かかって GANGRO になったまま学校来られる身になれ」
一応、彼なりに肌に悪いから気にするなと言ってくれたのかもしれないとユズは思った。

「ヒューヒュー」

アキが適当にユイとユズを冷やかしながら、同時に拗ねた様な素振りを見せた。

またしてもユイがアキを睨む。

そんなやりとりはそんなに特別ではないいつものことなので、ユズはそれを見て微かに笑った。

写真を撮ったのはそんなユイがアキに砂で生き埋めにされそうになっているところだった。

日光浴を楽しんでいたユイを無理矢理生き埋めにしたので、その後アキは半殺しにあったのだった。

サキが買ってきてくれたコーラを飲みほし、そんな彼氏の楽しんだ顔をユズは見ていた。

「アキ殺されるよ」

夏の定番焼きそばを食べながら、ユズの隣にサキが座る。

「大丈夫、私が生きてる限り死なないから」

「なに？愛の約束？」

「ま、そんなところ」

ソースが体にしみ込んできそうなほどの匂いとともに、サキは焼きそばを啜る。

少し沈黙があつた後、口を開いたのはサキだった。

「アタシ、もうダメかも」

急にしおらしく、体育座りをして姿勢を丸めたサキに、ユズは少し驚いが、まあこれもいつものことなので、そんなサキの長い茶髪を横目で見ながら答えた。

「アオちゃんのこと？」

『アオちゃん』とはサキの弟、アオのことだった。

今は高校一年で、サキと一つしか変わらない年子だ。

「アタシは結構アタクシしてるんだよ。でも親に見つかるやばいし、アオだつてまだ思春期じゃん」

「そーだね」

「アオはアタシのこと、ほんとにただのお姉ちゃんと思つてない、絶対」

いつも周りをひっぱっているサキが「恋愛」の話をするといつもこうだ。

といっても、相手は一つ下の弟で、彼女はそんな弟に恋をしている。歪んだ恋愛、というのはこういうものなのだ、とユズは初めてこの恋愛ドラマのような話を聞かされた時から思っていた。

「そりゃ、ほんとお姉ちゃん、それが真実だよ。で、アオちゃんと最近なんか喋った？」

こんな感じでいつもその恋愛ドラマの展開を大きく左右するのである

う、相談相手にユズは抜擢されている。

「それがさ、夏休みだからずっと一緒にいられると思ってたんだけどさ、アオ、彼女出来たみたいなんだよね」

「うそ」

「ホントだから喋ってんだよー。どーすりやいいんだよー」

一度上げた顔をまた下に向けて、サキは拝むように言った。

「しかもこの間その彼女家に来たから、どんな顔してても一発くらい殴らないと気が済まないと思って、わざと弟にはなんの感情も抱いてないお姉ちゃんのフリして挨拶に言ったら、すごい可愛いので！アイドルのセンター余裕で取れるくらいほんとに可愛いので！」

早口で、しかも涙目で更にサキは続けた。

「もう殴る気なんてしなかったよ。むしろ愛おしい弟にあんなに可愛い彼女ができたことが嬉しくなっちゃったの。絶望的だよ、終わったよ」

相談された方からすれば、むしろ初めから終わっていたのでは？と思ったが決して口には出さず適当にうんうんと顔を動かしながら話を聞いていたユズだった。

楽しかった海がだんだん夕色に染まっていくのが分かった頃、溢れていた人は皆いなくなっていた。

結局あの後永遠と続いた恋愛相談は、述語のない落ちによって終わったのだった。

「そろそろ行くぞー」

大きな浮き輪を抱えてアキがユズに近づいてきた。

もう海を離れる準備をしていたから、アキは短パンにＴシャツといういかにもな格好をしていた。

一方、ユズも綺麗な色合いのサマーワンピースを強い風に揺らしながらアキを見た。

「うわー、真っ赤」

すっかり赤く染まってしまった海を眺めてアキは言った。

ふいに、アキが険しい顔になる。

時々見せる、彼女がまだ見たこともない、新しい顔。

ユズは自分の鼓動が速くなるのを感じながら、大きく息を吸って思った。

そうか、風だ、と。

アキは風に似ている。全部同じ強さだと思えばふいに険しくなったり、穏やかになったり。

帰りの電車にギリギリ間に合って、それから彼らは分かれて帰った。ユズは少し焼けた自分の肌を見つめて思う。

そうだ、宿題やらなきゃ。

一人、家路を歩いていたら、自分を追いかけてくる影がちょっぴり怖かった。

この夏は一生忘れないかもしれないな、と直感的にユズは思ったのだった。

それはきつと、テレビの中だけの話。

新学期が始まって、私は寝坊した。

正確にはサボったのだ。

あの海に行った日からなんだか体調が優れなかった。

きつと無理にアオのことを考え過ぎたのかもしれない。

ベッドの気持ち良さにうつすらと目を瞑り、また考えた。

私は、弟が好きだ。

そんな弟にはもう彼女という存在がいて、私なんて世界で何番目かの存在にすぎない。

決して報われない感情を、私は所持している。

ベッドから勢いよく起き上がって、階段を使って下のリビングへと向かった。

リビングのドアを開けると、愛する弟、アオがテレビを見ながらお茶を飲んでいた。

私は朝食に使った食器を片づけている母に聞いた。

「今何時？」

すると母は呆れたように私を見て、

「八時半」

とだけ答えた。

「ごめんなさい」

「明日からは行きなさい」

母は優しい。

でも私は嫌いだ。そんな私に無関心な母が大嫌いだ。

そんなことを思いながら、私はさり気無くアオの隣に座った。

お茶の入ったコップを持つ、そのごつごつした手がいつも私の恋心に火を灯す。

その灯火は、私が消さない限り燃え続ける。

ふと、テレビを見た。

高校二年生の少年が、行方不明なんだそうだ。しかも一人暮らし。

「ねーちゃん」

急に声をかけられたのでびっくりした。

「何？」

声が裏返ったのが分かった。単なる会話でも緊張してしまう。

「この高校生の家ってうちの近くだよな」

「うん、そうなんじゃない？」

「でも俺、こんな騒ぎ全然知らねー。ねーちゃん知ってる？」

「ううん、知らないよ」

それだけだった。でも至福の時。

いつからかアオは思春期という厄介な時期に入った。

私の手を離れて、違うところに行くようになった。

アオ、と呼んでも一回では返事をしてくれなくなった。

そんなアオが私に話しかけてくれた、嬉しい。

アオは、すごく泣き虫だった。

まあ、弟としてはベタな展開だけど、ほんとに泣き虫だったのだ。例えば、道端に転がってたりするカマキリの死骸を見て泣いたり、テレビドラマで誰かが刺されたりなんかすると、すぐに泣いた。

そんな弟が、今や人が何人も死んで出てくるニュースなんか見て、普通に喋ってる。

なんだかすごくたくましく成長した。

弟の顔は私に全然似てなかった。

だから、きつとどちらかが養子なんじゃないかと希望を抱いていたけれど、母があまりにも私が生まれた時の話や、アオが生まれた時の話ばかりするから、ちがうんだと絶望した。

サボったのがいけなかったのか、その日の夕方、微熱が出た。

ただの微熱だから誰にも言っていないし、言う必要もないので、大人しくベッドに横たわった。

ふいに世界がぼやけて、睡魔がやってきた。

夢を見る。もちろんそれは、アオの夢。

可笑しな妄想がちよつとだけ現実になったように、アオが私の服を脱がせて抱き寄せる。

幸せだな、と思った。

女の幸せだと、思った。

そのままゆつくり押し倒されて、

涙が頬から落ちて、目が覚めた。

途端に、誰かが部屋にいるのが分かった。

——アオだ。

「どうしたの？」

急に興奮したので頭がクラクラした。

でも、今、私だけの視界に入っているアオを見逃すことは、できなかった。

「熱あるんなら、かーさんくらいにはちゃんとええよ」

頭が騒ぐ、跳ねる。

「なんで、誰にも言っていないのに。なんでアオ、知ってるの？」

感覚が鈍る、震える。

「今朝から目がおかしかったから一応部屋見に行ったらすごい暑かったから」

気づいてくれてたんだ、私に分からなかった私のことまで。

「ちよつと待って、もしかしておでこに手、当ててくれたの？」

アオは何食わぬ顔でうなずいた。

そりゃ、アオからしたらただの兄弟。

でも、私からしたら、一人の男の子。

もう、今すぐにでも飛んでいきたい気分だった。

顔、汗かいてたかな、綺麗な顔で寝れてたかな。

いろんな感情が手を繋いで、最後に辿り着いたのは、やっぱり嬉しい、だった。

17歳、好きな人におでこを触られる――。

次の日、学校に登校した。

教室に入っすぐ、ユズがやって来た。

「どうしたの？体大丈夫？」

ユズは私の親友だ。

彼女は私の無いものを持っている。それが私には羨ましすぎた。

一方、彼女の方はクールな私に憧れを抱いていると、前に言っていた。

本当は違うんだよ、クールなんかじゃない。

心の中で何度も叫ぶ。

けど、届かない。

次に声を掛けてきたのは来たのは、ユイだ。

いつものようにメガネをかけて真面目そうに、無理のしすぎだ、とだけ言った。

「あれ？アキは？」

「いるよ」

ユズが指差す方向に、確かにいた。

こちらに気づいて、アキが来る。

「サボりか」

「当たり前」

図星を言われた私は反論できずに素直に答えた。

そして、みんなに昨日とアオのことを言った。

みんな素直に聞いてくれた。

声を掛けられて嬉しかったこと、手がカッコ良かったこと。

おでこを触られてすごく嬉しかったこと。

傍から見れば可笑しな話だけど、私はおかしな子だからそれでも良いと思う。

昼休み、一人になった。

ユズは日直の仕事で、ユイはアキと一緒に昼ごはんを買いに行ったのだ。

教室にはほとんど誰もいなくて、寂しかったけれど、まあいいかと思っただ。

少しの間うとうとして、窓から入ってくる風を浴びながらグラウンドでサッカーをしている男子を見ていた。

すると、何人かの取巻きを連れたギヤルが私に話しかけてきた。

「ねえ、ちょっと聞いていい？」

変に挑発的な言い方をされたので、こちらも挑発的に睨んだ。

「何？」

「あんたってさあ、好きな人とかいるの？」

好きな人、という言葉聞いて私は反射的に怯んだ。

「ねえ、いるの？」

「どうなのよ」

取巻きたちが野良犬の如く、キャンキャンと泣き始めた。

「い、ない」

一瞬、沈黙になった。

それから、言った。

「好きな人なんて、いない」

「うそ」

ギヤルの一人が噛みついてきた。

「うそなんかじゃ、」

「弟なんでしょー？」

えっ、と思った。体が震える。

牙を向いて私の腕に噛みついてきた野良犬たちが、今度はその腕を、引きちぎってきた。

「まじー？きもっ」

「てか、あり得ないよねー、弟も迷惑なんじゃない？」
今、思い出した。

私が前、この野良犬たちが万引きしてるところを、定員に言った時の万引き犯たちだ。

でも、思い出すのにはもう遅すぎた。
遅すぎたんだ。

「ちよつと、なにしてんの」

急に教室のドアが開いて、野良犬たちは牙を向く方向を変える。
ユズだ。

「べつに」

野良犬たちがそっぽを向いてしっぽを丸めた。

「ふーん、あつそ」

教室からそそくさと出ていく野良犬たちに向かってユズが言った。

「ほんと、かわいそうだね、あんたら」

急にすつきりした。

「ありがとう、ユズ」

「どうせ、アオちゃんかどーとかでしょ。暇ねーあの子ら」

ああ、ユズが男だったらしいのに、と思った。

そしたらこんな思いしなくてすんだのに。

放課後、四人でカラオケに行った。

ユズが今日のことで落ち込んでる私を励ます道具に、カラオケを選んだのだ。

アキのオンチな歌を聴きながら、ジュースを飲み干す。

ユズがゲラゲラと笑ってアキを馬鹿にした。

「アキ、ピアノうまいのになんで音痴なのっ」

「ピアノは俺が好きだけど、歌は俺のこと嫌いだから」

得意げにアキが言った横でユイが、

「俺もお前の歌が嫌いだ」

そんなことでまた盛り上がった。

急に喉が渴いてきて、私は空のコップにジュースを入れに行った。

その時、足が止まった。

アオが、いた。

しかも可愛い彼女とキスまでしていた。

繰り返し、何度も何度も唇を重ねてはお互いの目を見て、鼻をくっ

付け、また唇を重ねた。

吐き気がした。

私の弟に、手を出さないで。

私の一番、大事な人を奪わないで。

私のこと、見捨てないで。

アオ、アオ、ああ、ああ、蒼。

私は持っていたコップを床に叩きつけると、そのままトイレへと駆け込んだ。

吐き気が止まらない、無理だ、もう、無理。

間一髪で便器に顔を埋めると勢いよく吐いた。

涙も吐いた。

もう私の体には水分が無いのではないかと思うくらい、全部出し切った。

あんな弟の顔を、私は初めて見た。
好き。

この二文字をいうのにどれだけの未来が崩れるんだろう。

私はそんな勇気がなかった。

ただ歪んだ愛を友達に聞いてもらっているだけの、好きでしかない。

『弟なんですよー？』

『つか、あり得ないよねー、弟も迷惑なんじゃない？』

私は吐いた臭いと共に今度は咽び泣いた。

その時、トイレのドアが勢いよく叩かれた。

「サキ？いるんでしょう、開けて」

ユズだ。

「なかなか来ないから、ドリンクバーのところにいったら、その」

「今、無理だよ。だって吐いちゃった」

「今から言いに行こう」

ユズが大きな声で私に説得するように言った。

「何を？」

「告白」

私は怒り狂いそうになった。

「なんで！あんなのもう見たくないし、空気がちがう！」

「じゃ、いつになったら実るの、あんたの恋」

はつとした。ユズは私の歪んだ恋愛をちゃんと実るようになんて考えてくれていたんだと気づいた。

その瞬間バカらしくなった。

弟だからって何だ、という理屈じゃない思いが私を支配した。

私は弟じゃなくて、蒼を好きになったんだ。

「分かった、言う」

勢いよくトイレから出た。

その時のユズの顔はまるで母のようだった。

もしかしたら母は私が蒼を好きだと知っていたのかもしれない。

ごめんね、お母さん。どうしようもない娘で。

そんな思いを母のようなユズにぶつけた。

もう一度あの場所に行くと、蒼は一人になっていた。
あの可愛い彼女はもうどこにもいなかった。

「蒼」

私が名前を呼ぶと、すぐに振り向いた。

「ねーちゃん」

驚いていた。

蒼は私の顔を久々に見てくれた。

それが、嬉しかった。

その嬉しさと共に私は吐きだした、全てを。

「蒼、好き」

また、驚いていた。

姉としてではなく、一人の女としての私の声は届いたらしい。
それから、蒼は泣いた。

私とユズは驚いた。

「ちよ、蒼、嫌だった？ごめん、ごめんね」

「ちがうんだ！」

急に大きな声で否定するので、私は拍子向けた。
だって、普通は嫌じゃない、彼女までいるのに。
なのに。

「俺も、好き」

空気が変わった。

その言葉は弟としてでは無いことがすぐに分かった。
一人の男として言ってくれた。

「じゃあ、彼女は！？キスは？」

私が尋ねると、蒼は首を横に振った。

「あの子は俺がねーちゃん好きな衝動を抑えられなくて作った彼女。」

でもさつき別れようって言ったら、『キスしたら別れる』って言いだして」

ふっと一呼吸して、もう一度蒼は言った。

「咲、好き」

ああ、なんだ。

もう、実ってたじゃん、恋。

未来なんてどうでもいい、社会なんてどうでもいい、もう全部、蒼と、みんな以外、どーでもいいや。

気が付いたら家に帰ってた。

たしかあの後お幸せに、とだけ言い残してユズが戻っていったので、私たちは帰ることにした。

手を繋いで、帰った。

幸せだなって思った。

「女の幸せ」だなっと、思った。

「咲」

うるっとした蒼の目が私を見つめた。

そして、誰もいないリビングで、抱き寄せてくれた。

そのまま私は、幸せをかみしめて、落ちた。

「俺、フランス行くんだ」

落ちた時に言われた。

ふらんす、聞きなれない響き。

ということは、もう離れ離れになってしまっ

そなの、私の返事は決まっていた。

「行つてきなよ」

あつさり、口にした。

それに乗せて蒼も、うん、行つてくる、とだけ言った。

だつてもう一緒には暮らせない。

それに海外に行つていろんなことをして、いろんなことを学ぶのは蒼の夢だったから。

これでいい。

蒼がフランスに行つて、二週間がたった。

私にとつて、とてもとても時間の流れが遅く感じられた。

そんな私は今、蒼からの手紙を読んでいる。

『今から自分に正直になる』

とだけ書いてあつた。

その言葉がなんだか染みて、もう一度自分の口に出して言ってみる。

「自分に正直になる」

うん、良い言葉だ。

現地で知り合つた人たちと写つた写真も同封してあつて、なんだか羨ましかった。

蒼は私の知らないところへ行つたけれど、私の知っている蒼はまたきつと戻ってくる。

ふいに、テレビをつけた。

またニュース。

この間、蒼と一緒に見た高校生行方不明のニュースだ。

もう、死んじやつたんじゃないかな。

と、思ってしまった。

だってニュースって結局誰か死ぬんだもの。

そんな物騒な考えはニュースからコマーシャルに変わった時にはすっかり忘れて、それに映る炭酸飲料に心を揺さぶられていた。
飲みたいな、と思った。
買ってこよう。

近くのコンビニで。

どうせいつかは、飽きてしまう話。

光の反射が妙に眩しかった。

目を細めると、ただでさえ細い目がさらに細くなってしまったので、結局眩しさに抵抗することができないまま校門を不機嫌な顔で通ってしまふ。

そんな俺の朝はいつも同じだ。

母のまずいスクランブルエッグを食べるのにもう慣れた、いつもと変わらない朝。

教室までの廊下はまだ秋の途中だというのに、妙に寒かった。いつも割と登校時間が早いが、今日は特別早くなってしまった。もう少し遅く来れば良かった、と後悔する、少し違う朝。教室の扉を開こうとすると、珍しく開いていた。

普段ならこんな時間に来るやつは大抵、誰かに鍵を開けてもらうのを待つか、諦めて自分で取りに行き、だらだらと扉を全開にして寝てるかなのだが。

勢いよく開けるとキイツと嫌な音を立てる扉なので、俺はゆっくりと扉を開けた。

扉を開けると、一人ポツンと窓際の棚に立っている女子がいた。

「ああ、ユイだ。おはよう、早いね」

短い単語を並べただけの挨拶をして、彼女は花瓶に花を入れた。

ユズ。俺の「友達」かもしれない人物だ。

「それ」

俺が花瓶の花を指差した。

「あ、これ？毎日変えてるの。私、花好きだからさー」

ユズは時々、見かけでは考えられないことをする。おもしろい。

「知らなかった」

「気づけよー」

「悪い」

本当に申し訳なくなってしまう自分がいた。
変に気を使う。

「別に、謝らなくてもいいよ」
くすくすとユズは笑った。

俺がうつとうしかった朝の光が、ユズに照らされて胸の中が動く。
今日の朝は委員の用があつたが、別にいい。

ここにいたかった。

今日は特別違う朝だ、と感じた。

誰も、来るなよ。

来たらぶん殴ってやる。

ああ、そうじゃなくて。

来るな、来るな。

頼む、来るな。

誰かわからない相手に、根拠のない何かを頼む、いつもと違う朝。

ユズと初めて会ったのはたしか、高校一年の時だ。

俺と同じクラスで、しかも席が前後だったアキには彼女がいると聞いた。

ま、もともと俺とアキとは中学は別々だったが、小学生の時に家が近く、幼馴染だった。

それから俺は別のところへ引っ越し、思えばそれ以来になる。

あんな奴の彼女とは、よっぽどの変わり者だな、と思っていた。

その日の放課後は今も続けている委員会の集まりがあり、帰りが

随分遅くなった。

時計を見ると午後七時。

すっかり暗くなった校門を出ると、白いブラウスが見えたので、幽霊かと思つて素通りしようとしたが、急にその幽霊に呼び止められた。

「ねえ、エサ持つてない？」

「はあ？」

反射的に答えた。

見ると、黒い髪を腰まで伸ばした同じ高校の女子生徒が、草むらに立っていた。

明らかに幽霊と呼んでもおかしくはないレベルだ。

俺は目つきの悪い自分の目をさらに悪くして、睨んだ。

「エサなんて持つてゐるわけないだろ。猫じゃあるまいし」

そのまま立ち去ろうとすると、後ろから勢いよく引つ張られた。

「その猫が大変なの」

そいつはそのまま俺を強引に草むらの中へ連れ込んだ。

「お腹空いてたみたい」

それはベタだが単純な文章だった。

あの後俺をコンビニに買い出しに行かせ、そのまま有無を言わずに捨て猫にエサを与えた彼女は、同じ高校の生徒で、俺には全く興味の無い態度をとっていた。

エサをうまそうに食っている猫は白い毛に所々茶色い模様のある見た目だった。

「おまえ、何年？」

「一年」

即答。

彼女は猫にエサをやり終えると、自分のタオルにくるんで帰ろうとした。

「おい、持って帰るのか？」

「うん」

これもまた即答。

どうやらこいつはすごく極端な人間なのだということが分かった。その時、雲で隠れていた三日月が、ふいに彼女を照らした。

——正直のところ、その時驚いた。

そいつが月をバックにして立っているのが恐ろしいからではなく、そいつの身長が予想以上に低かったからではなく、ただ、ただ。

——この俺が初めて「美しい」と思った女が、そいつだったからだ。

「ユイっ！ユイっ！俺の彼女！今日紹介すっからさー！」

昼休み開始のチャイムと同時にやけにテンションの高い幼馴染が話しかけてきた。

あれから、あいつに会ってからとはこれといって何の変化もなく、あの後の猫はどうなったのかとかそんな事を考えるようになった。あいつの顔も、正直のところはつきりとは覚えていない。

そんな事を考えていたら、意識のないまま階段前の廊下に放り出されていた。

目の前にはアキと、彼女であるらしき女子の姿が見えた。

髪はミディアムで黒髪だった。

「これ、俺の彼女」

「はじめまして……ってか何でアキの友達紹介されなきゃいけないのよ」

「ま、顔知つとくだけでもいいだろ。例えば、教科書忘れたときに

貸してくれるかも！」

「それはアキだけ」

まるで漫才のようなやりとりを聞いて呆れる。

「っと、こいつの名前は佐々木 結。俺のダチ」

「誰がダチだ。俺は思ってたねーから」

「まあまあ！で、こっちが倉石 柚子」

「どうも」

倉石が頭を下げる。

「どーも」

俺も続けて下げる。

「じゃ、そーゆうことだから」

アキの身勝手な言葉で、二人の、どうも、という会話は強制終了させられた。

「じゃ、私も戻る」

倉石もうんざりした顔で去っていった。

その後をさらにうつつとうしくアキが追いかける。

疲れた、と感じた。

それから一週間経ったころ、偶然夜のコンビニで倉石と会った。倉石はコンビニ袋に、大量の猫缶を入れて、帰ろうとするところだった。

俺はその光景を見て、おもわず笑ってしまったのだった。

帰る方向が何故か同じだった俺たちは、少し歩いて帰ることにした。

そして何故か俺は、猫缶袋を両手にぶら下げる状態になっていた。

「ありがとう、それ、持ってくれて」

「いや、別に」

ふいにお礼を言われたので、どう返して良いのかも分からず、結局

は氣を使つた返事になつてしまつた。

「その猫缶、何に使うんだ？」

「うち、猫飼ひ始めてさ、だから猫に使う」

俺が沈黙を防ぐために溢した疑問を彼女はあつさりと返す。

猫……。そういえばあの長髪の奴はどこに行つたんだろう。

学校の中でも見かけることはなかつた。

夜空を見上げると、ちょうど月が綺麗な頃だつた。

あの時は三日月だつたが、今日は満月だ。

綺麗な月を見ているうちに、いつの間にか倉石の家まで来ていた。

「キミ……つと、あ、佐々木。今日は荷物持ちありがとう。じゃね」

決して長くはない髪が風と共になびいた。

倉石宅のドアを開く一歩手前、倉石が、帰ろうとする俺を呼び止める。

「佐々木！」

ちょうど雲に隠れていた満月が顔を出した。

「今日は月が、綺麗だね」

それから倉石とはよく話すようになった。

アキと一緒に三人で可笑しな話をするようにもなつたし、それからしばらくして倉石の友達だという、園崎 咲とも親しくなつた。

もう夏になろうとしていたそんな頃。

俺たちは途中まで一緒に下校することにした。

また可笑しな話をしながら、四人歩幅をあわせて帰る道はとても暑苦しく、遠くで微かに蝉の音がした。

「こいつ飽きっぽいんだよ」

アキが俺を指して笑う。

「そうなの？ユイ」

園崎が笑いながら俺に問いかける。

「いや、むしろこいつの方が飽きっぽい」

俺がすかさず否定すると、なんだと、おまえ！と、アキが首に手をまわしてきてじゃれてくる。

「じゃ、好きな人なんて出来なかったんじゃないの？」

倉石がそんなことを俺に聞いてきた。

そつえば、そんな気がした。

俺は今まで好きになった奴なんていたこともなかったし、興味もあまりなかった。

小学生の頃、女子からもらったバレンタインチョコを半分アキにあげて、残りの半分は自力で持って帰ったのだが、結局はチョコレートの甘い味に飽きてしまい、そのチョコレート自体トラウマになった。

以来、チョコレートは食べていない。

「で、どうなの？」

嫌な思い出に浸っている間にも、先ほどの質問はまだ答えが出されないまま、空中をふわふわと浮いていた。

「こいつの好きな奴とかの話、あんま聞かねーな、俺は」

アキが思い返しながらつぶやく。

「俺と離れた後の中学時代はどうなんだよ。好きな奴とか」

「いや、いたこともない」

俺が冷静になって答える。

「げ、マジで!？」

園崎が変な目で俺を見ってくる。

「なんだよ」

「嘘とかじゃないよね？」

「こんなとこで嘘ついてどうすんの」

倉石が園崎にすかさず突っ込む。

「えー、怪しいな」

「ねーよ」

話に間切れて、ふいに空を見た。

青と赤が融合して、その間からうつすらと月が見えた。

そういえば、この間の猫の女、俺が生まれて初めて美しいと思った女だった。

あれは――、『好きな人』なんだろうか。

美しい、と思うだけで『好きな人』なんだろうか。

そう感じたことのない俺には、何も分からなかった。

アキと園崎とは途中の分かれ道で別々となった。

俺たちは前に偶然倉石と会ったコンビ二を、無言のまま横切って歩く。

「ピピピピピ」

突然、倉石の携帯電話が鳴った。

「はい？あ、おかーさん？うん…、うん…、え！」

別れの挨拶もなしに電話を切った後、今にも泣き出しそうな顔でこちらを向いて、倉石が言った。

「どうしよう！猫が！」

走った、走った、走った。

名前を呼んでもちつとも姿を見せない。

あの後、倉石の猫が家を脱走したと聞き、俺たちは近くを探しまわることにした。

メガネと顔の間に汗が溜まる。

気が付けば俺は学校のすぐ近くを歩いていた。

たしかにここは倉石の家からはそう遠くはないし、探してみる価値はある。

「はあ、はあ…、ったく」

まったく、この間からあいつに振り回されっぱなしだ。

何故この俺のペースが崩れるんだ、崩せるんだ。

アキにだって、こんなことはなかった。

「プルルル…」

噂をすればと思いつつ、俺は自分の携帯を耳にあてた。

『もしもし！猫見つかった？』

倉石の声が少し震えているのがなんとなくだが分かった。

「まだ」

『怒ってる？』

「かなり」

急に後ろからカサカサと物音がした。

「あ、猫」

草むらから猫が間抜けな顔で俺を見つめていた。

『え！？どこ！』

「学校の前」

『分かった！すぐ行く！』

電話を切った後、猫は自分の方から俺に寄って来た。

もう辺りはすでに暗く、月が雲の上から顔を出した。

と、同時に俺は驚いた――。

その猫は白い毛に所々茶色い模様がある、あの夜に見た猫だったからだ。

いや、まさか、そんなはずはない。

「あ！良かったー！その猫だよ！うちの猫！ありがとう」

動揺する俺のもとに、倉石がやって来た。

いや、そんなはずはない。

きつとあの時とは違う猫だ。

それに、彼女は髪がとても長かった。

それなのに、俺は頭の中の疑問を倉石にぶつけてしまう。

この猫、何処で拾ったんだ？と――。

倉石はきょとんとした顔で、その後少し笑って答えた。

ここだよ、と――。

「佐々木」

そして倉石はとびきりの笑顔で月に照らされてこう言った。

「今日は月が、綺麗だね」

月が、落ちた。

俺はひどく美しい夢を見ていたような気がしてしかたなかった。

あの日倉石と別れた後、アキにすぐ電話して聞いた。

倉石は髪を切ったのか？と。

もちろん答えは「ああ」だった。

あいつはあの後、髪をバツサリと切ったらしい。

ああ、落ちた。

俺はどんどん落ちていく。

頭の中に丸過ぎるほどの月が俺を包もうとする。

初めて美しいと思った。

可愛かった。愛おしかった。

俺は完全に、倉石に落ちたのだった。

これが、今になって続く格好悪い俺の片思いの始まりだ。

ユズはアキの彼女で、アキは俺の親友なのかもしれないやつだ。

「なにぼーっとしてるのー？ふふ」

ユズが俺を見てクスクスと笑った。

ほら、またその笑顔。

こいつには、敵わない。

どうせいつかはバレンタインのチョコのように、きっとユズのこと
も飽きてしまうだろう。

俺は飽きっぽいから。

俺は不器用だから。

だからまだ誰にも言っていない。

ユズが「好き」だと。

あれはたしかに、愛しき人。

『只今、午前七時です』

もうすぐ、秋が終わる。

テレビをつければ時刻を言われる。

朝のお父さんの紅茶はとても苦い。もうちょっと砂糖を入れてくれればいいのに。

あ、「砂糖」で思い出した。

昨日佐藤さんから頂いたベーコンパン、今日はあれを朝ごはんにしよう。

「いつてきます」

お父さんが仕事に行く音がした。

「あ、いつてらっしゃい」

硬い、と感じた。

朝からベーコンは、硬いな。

『それでは、次のニュースです。二か月前から行方が分からなくなっている、男子高校生の行方が未だ分かっておりません。警察は何かの事件に巻き込まれた可能性が高いと……』

二か月前…といえば、まだサキとアオちゃんが一緒に住んでいた時期だな。

というかこの高校生の家ってうちの学校の近くじゃん。まずい、と感じた。

このパン、まずいな。

「おはよー」

花が生きていると感じる。

私がいさつすると元気を出してくれるような気がして。

「よ、ユズ」

私が花の手入れをしていると、ユイが教室の扉を開けて中に入ってきた。

ここ最近、ユイの登校時刻が少し早くなった。

なんでだろ。きっと委員の仕事があるのかもしれない。

「今日、冷えるな」

ユイの言葉はトゲがあるけれど、本当はとても情熱的で優しい薔薇みたいな人。

「そだねー」

私は何気なく答えた。

「最近」

と、私が思い返したように言う。

「アキのピアノ、聞いてないね」

「そういえば、そうだな」

私たち二人はあまり会話が弾まない。

そういえば、前にもこんなことあったっけ。

そんなことを思っていると、次々に登校してきた生徒が教室に入ってきた。

さみい、とか、ねむい、とか。

そんなことを言って教室に入ってくる人達が、私は愛しかった。

昼休みになった。

アキはサボったのかなんなのか、学校に来ていない。

お弁当を食べようとして、思い出した。

今日はパンを買うはずだったのだ。

最近仲良くなった母親にお弁当を作ってもらっているサキが、私の様子に気がついて言った。

「急いだ方がいいんじゃない？もう売り切れるよ」

「うん」

私は早足で教室から出て行った。

サキは明るい。

そして暗い。

いつも弟という太陽の方向ばかり見ているので、私はサキを向日葵のように感じる。

大きな黄色い花びらを一枚一枚枯れまいと守っているから。

でもその命は太陽が一番近い季節まで。

サキはまだ冬から脱出できていない。

パン争奪戦に負けて、お腹が鳴り始めた頃、ピアノの音がした。誰の音か、私は知っている。

私は急いで一階から四階までの階段を登り、音楽室の扉を勢いよく開けた。

「飯！！！」

ピアノがピタリと止む。

「おいおい、今日初めて恋人に会った第一声がソレかよ」

アキがピアノからひよこつと顔を出す。

「パン争奪戦に負けた」

「とろいんだよ、おまえ」

「うるさいな」

わずか数秒沈黙があった後、私が今日のアキに聞いたのだした。

「なんで今日、サボったの？というかいつから来てたの？」

また沈黙。

そしたらアキが変な言葉で答えた。

「ちよつとな…ま、いろいろ」

なんだか答えになつていないようで、私は若干ムシャクシャした。

「ピアノ、久しぶりに弾いてやるよ。何がいい？」

「カノン」

アキのピアノは魔法そのものだ。

勉強も出来ない、運動もそんなに得意じゃない。でも、ピアノだけはずば抜けている才能の持ち主だ。

ちよつと前に海外の方に留学しないかという音楽の先生からの誘いをめんどくさいという理由で断つたらしい。

私には留学とか、進路とかよく分からないことでも決めなきゃいけないことがある。

「カノン」を聴きながらふと考える。

私は何になりたいんだろう、と。

そして思う。

アキと一緒にならどこでもいいや、と。

アキのピアノがないこの頃は、なんだか気分が落ち込んですごく苦しかったから、やっぱり私はアキのピアノの音を吸って二酸化炭素を吐いて生きているんだと自覚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4315q/>

「風」という名の人。

2011年11月15日17時18分発行